門川久は極東硝子高砂工場の労務課員として新規に稼働する工場の充員に忙しい毎日を送っていた。日本の高度成長がピークを迎えた昭和４６年のことであった。実家で休暇を過ごすといって出かけた門川久が行方不明になった。

書道を趣味とする寿司屋の娘門川佳子は兄が失踪したのは家業が原因であったのではないかと密かに考えていた。そんな佳子も寿司を食べに来る新聞記者の桑山由雄に恋心を寄せるようになっていた。

ある日桑山は大学時代の友人原良彦の新妻・原美代子の父で山王化学の常務取締役岡元克彦が日本でも有名な書の収集家であることを知り、佳子の関心を引こうと書を鑑賞するために原良彦の斡旋で佳子を岡元克彦宅へ連れていく。

岡元宅で佳子は桑山には内緒にしていた兄のことをぽろりと漏らしてしまった。一人娘だと信じていた桑山に追求されて遂に兄久が失踪した事実を告白せざるをえなくなった。

原良彦の妻美代子は独身時代は関東石油の秘書課に勤務しながらテニス部の女王として振る舞い独身男子部員達の憧れの的であった。岡本美代子が関東石油に入社できたの

は山王グループの重鎮である父岡元克彦の影響力があったからである。関東石油の工務課の山本は国立大学出身で野心に燃えた正義感旺盛な青年であり、現場でも下請け業者にも人望のある係員でテニス部のキャプテンでもあった。山本は密かにテニス部の女王美代子に好意を寄せるようになっていたが、それとは裏腹に美代子は東大出の秀才で大蔵省勤務の原良彦と見合い結婚し早々と寿退職してしまう。

関東石油の横浜工場の定期修理工事の最中に労災死亡事故が山本担当の現場で発生する。しかも被害者の身元が不明という厄介な事故であった。死者は松山一朗と称していたが偽名であった。

この労災事故の発生した工区を担当して施工したのが報国工業であり沢村勝が工事部長として工事を取り仕切っていた。関東石油の定期修理工事の受注については報国工業は構内常駐保守工事業者としての特権を生かした特命受注が多く報国工業のドル箱工事でもあった。この報国工業の牙城を狙って東都プラントは色々と策謀を凝らすのである。

労災死亡事故の発生した時、関東石油の工場幹部は工事担当社員の山本と請け負い業者の報国工業に責任を転化することに終始し自分の立場を守ることに必死であった。責

任転化され起訴されたとき山本は関東石油に見切りをつけ、会社を退職し大阪の兄の許へ行き貸しおむつ屋という奇抜な事業を始めることになった。

商売も軌道に乗りはじめた山本は、佳子の実家の寿司屋へも出入りするようになっていた。ある日、佳子が自室で酸欠状態となり意識不明になった現場へ行き合わせた。早速口移しの人工呼吸術を施し佳子は一命をとりとめた。これを契機に山本と桑山の佳子をめぐる恋の葛藤が始まる。

身元不明であった労災事故の被害者松山一朗の身元がふとしたことから判明しそれは門川久であった。三年目の解決であった。この作品の中では日本の高度成長を蔭で支えた中小工事会社の工事管理の実態と大企業の経営者や管理者の無責任と保身行動が活写されている。そして組織の横暴に敢然と立ち向かった正義感溢れる青年があえなく潰されていく悲しい物語でもある。